

『平家物語』研究―考証と研究史

要約

平藤
幸

『平家物語』研究―考証と研究史 要約

この論文の構成を目次で示せば、次のとおりである。

序論 『平家物語』研究方法論序説―本論の概要とその意義

本論 『平家物語』考証と研究史

第一編 伝記考証

第一章 平氏一門

第一節 平重盛

第二節 平時忠

第三節 帥典侍

第二章 親平氏公卿

第一節 藤原経宗

第二節 藤原隆季

第三節 藤原親雅

第二編 諸事考証

第一章 安徳天皇の周辺

第一節 安徳天皇大嘗会延引

第二節 安徳天皇の同興者

第二章 平氏の動静

第一節 平氏都落ちの尹明と全真

第二節 『平家物語』富士川合戦の水鳥

第三編 研究史

第一章 研究史上の『平家物語』

第一節 『平家物語』の成立論・古態論

第二節 『平家物語』研究二〇〇四～五年の動向

付編 年譜資料

一 平時忠略年譜

二 『平家物語略解』著者御橋惠言年譜

序論 「『平家物語』研究方法論序説―本論の概要とその意義」は、この論文の内容を概説しながら、その方法意識を簡潔に説明することを意図したものである。本論各論の論述の中にある方法意識を具体的に示そうと努めた。これには、この論文自体を支える方法論であると同時に、今後の自分自身の『平家物語』研究の方向性を確認する意味もある。

本論第一編「伝記考証」は、平氏一門の三名と親平氏公卿三名の伝記考証で、その第一章「平氏一門」は、平氏一門の中核にあった平重盛と平時忠夫妻の伝記考証論である。

第一節「平重盛」は、平清盛の嫡男重盛の生涯を概観しつつ、史実と物語と評論史の中に揺れ動く重盛像の意味を探った。時子所生ではない重盛と、時子を母とする弟宗盛らとは後白河院側に対する距離感が微妙に異なり、それが重盛の心のありようや生きざまを制約し、『平家物語』が描く重盛の仏教への深い帰依心も、その心性を基調にした故であると捉えられることを指摘した。『愚管抄』や『平家物語』に記される死に急ぐ重盛の姿に、近世近代の思想的評論が、時代を拓く英雄たる清盛評の反動として儒教的道德の具現者として称揚されてきた重

盛を逆転して貶めるに至る要素があることを確認した。しかし、史実としての死因たる罹病は重盛自身の責ではなく、むしろ平治の乱の戦いぶりや殿下乗合事件の振舞いにこそ、平氏の棟梁、武門の総帥たる重盛の資質を見るべきであることも論述した。史実や『平家物語』の人物造型あるいはそれに基づく思想的評論の中で、君父への忠孝や武家の棟梁たる矜持や浄土への憧憬の間に相克する重盛の形象に、近世以後の知識人達が情理両面で批判と愛惜とを与えるような傾向が生じたとも考えたところである。

第二節「平時忠」は、時忠の伝記についての基礎研究である。時忠は『平家物語』においても、治承・寿永合戦前後の史実の上でも、その存在は無視し得ない人物であり、これまでもその伝記考証・物語人物論がなされてきた。しかしながら、たとえば、姉時子との長幼の問題といった基礎的な事項すら、これまでの『平家物語』研究においては曖昧なまま捨て置かれていたのが実状である。まずは時忠伝におけるこのような基本的な問題点を改めて整理し直し、時忠の母が「半物」であること、時忠は時子の兄ではなく「弟」であること、清盛家との結びつきが非常に強いことを考証し、これらの点は時忠の官途にも深く影響していることを指摘した。その時忠の官途の中で、これまで見過ごされてきた、時忠の官人としての出発点は非藏人であること、時忠はその直系血族の中では初の三事兼帯者であること、史上初めて検非違使尉・佐を歴任した上で別当となったこと、などを確認した。従来、時忠の異例の昇進は、清盛・滋子の庇護によるものという説明しかなされてこなかったが、それに加えて、実務官人の血脈を十分に受け継ぎつつ、時忠自身がそれを存分に生かしていたことも大きな要因であろうと考えた。そしてその時忠の昇進に大きく関与していたと思われる時忠の能力とは具体的にどのようなものであったのかを知る手がかりとして、『玉葉』の四つの記事について考察した。そこから、九条兼実から見た時忠は、故事先例に重きを置くものの、その用い方に問題のある人物であったことを考証した。しかし、そこには「時忠自身の合理性」というものが働いていることを指摘した。また、このような時忠像は、『平家物語』の二つの記事が描く時忠に共通していることを検証した。

第三節「帥典侍」は、時忠の室であり安徳天皇の乳母でもある帥典侍藤原領子について、伝記上の問題点を整理し、乳母としての具体的役割を確認した。『たまきはる』の「民部卿殿」は領子ではないこと、領子は『平家

物語』の「滝口入道」として著名な藤原時頼の乳母子とされるが、この場合は幼君を養育する任にあたる人の子の意であろうこと、を考証し、時頼の平氏親近には領子が与っていたことを指摘した。領子は安徳天皇の女官・乳母体制の中心であり、他に乳母としては大納言典侍輔子（平重衡室）もいて、両者は記録上でも『平家物語』上でも「乳母」「内侍」と区別なく記されるが、「乳母」としては領子が先任かつ中心であり、常に奉抱する役割を担っており、後宮の女官としての「典侍」の役割は主に輔子が担っていたことを指摘した。そしてその役割の違いが、『平家物語』の両者の描かれ方の差に僅かながら反映していることも指摘した。

第一編第二章「親平氏公卿」は、平氏一門に親近し、特に前者二者は、いわゆる平氏政権においても重要な役割を果たした人物三名の伝記考証である。

第一節「藤原経宗」は、かつては二条天皇側近として活躍して後白河院政を廃そうとし、一時は配流の憂き目に遭いつつも、召還後は後白河院政下・平氏政権下で重用されて二十六年もの長きに渡って左大臣をつとめた藤原経宗についての考察である。経宗が公事故実に通じていたことはよく知られているが、平重盛・宗盛も、おそらくはゆくゆく大臣として政界を主導することを期待され、経宗に故実を学んでいたことを、『玉葉』『愚昧記』『山槐記』等の記事を挙げて指摘した。撰関家の故実こそが正統と信じる九条兼実から見れば、花園流故実を受け継ぐ経宗は「口伝不受」「大事不学」の人であり、兼実の経宗に対する嫌悪は、『愚管抄』が記す藤原忠実（兼実の祖父）への親近と忠実男忠通（兼実の父）方からの不信に通じるものがあることを推察した。兼実男良経もまた、経宗の伝える故実に疑問を抱いていたことが、九条忠教（良経の玄孫）筆と思われる『大嘗会叙位除目等雑注文』をとおして知られることを指摘した。さらに、『吉記』によれば平氏都落ち間近の養和元年（一一八一）六月時点に於いて、重盛の室家と息男の養父たる経宗が宗盛と疎隔せず、宗盛による維盛（重盛男）の蔵人頭推輓の意志を院近臣に伝達し、それが結果的に奏功したという事実も見逃せず、経宗は藤原成親のように平氏に負の作用を及ぼさず、早くとも平氏都落ちの前の時期までは平氏一門の朝政・朝儀に於ける活動を導き、一門の結束にも与ったらしいことは、親平氏公卿の在りようの一例として積極的に認めておく必要がある、と考えた。

第二節「藤原隆季」は、『平家物語』のみならず当時の政治史・文学史上に看過し得ない人物である藤原隆季について、その伝記を整理し、検討を加えたものである。隆季はこれまで、管絃や詩歌に秀で、姻戚関係を巧みに利用し、故実に通じて政界遊泳に長けていた、というように評価されてきた。頼長との男色関係も指摘されている。ここに、改めて宮廷官人として、「諸大夫」と蔑まれる家柄でありながら、清盛や後白河院との関係の中でめざましく栄達していった姿が浮かび上がるのである。特に清盛（平氏）の与同であったことの意味を明らかにし得た。また、その処世法を『玉葉』に探ると、故実先例についての知識用法は相当程度の水準に達していたことが窺われるが、一方で摂家嫡流の九条兼実から見れば、その振る舞いに問題が無いわけではないという一面も明らかになった。その上で、一上がつとめるべき執筆に任じた隆季の問題点を細かく追ってみた。さらに、『山槐記』や『吉記』という摂家庶流や隆季と同家格の記主からみた隆季像が兼実から見たそれとは異なることに言及し、そういった多面的評価は、まさに隆季自身の生き様に要因が求められることを論じた。その後の四条家の継承と繁栄は、その隆季の生涯を踏まえて捉えるべきことを指摘した。

第三節「藤原親雅」は、『平家物語』「南都大衆撰政殿ノ御使追返事」（延慶本）に、撰政使として名が見える「有官別当忠成」と「右衛門権助藤原親雅」について、その人物像と撰政使拜命の意義などを明確にすべく論じた。親雅の閲歴を辿ると、撰政使として南都に派遣されて然るべき人物であり、その点で、『平家物語』の記述は合理性を有することがわかる。また、諸注混乱していた「有官別当」を「弁別当」と区別した上で、『百練抄』で南都への派遣が裏付けられる「有官別当忠成」とは、『玉葉』が「勸学院別当」と注記する「雅楽少允正六位上藤原朝臣忠成」を指すと見てよいことを確認した。撰関家の権威を携えて派遣された両者は、南都の大衆の蜂起・狼藉に力無く追い返されるのであり、『平家物語』では「忠成」にも「親雅」にも焦点が当てられていると言えない。がしかし、この折に「有官別当忠成」と「右衛門権助親雅」が撰政使として南都に派遣されたという記述は、歴史の事実を相応に反映したものと考えて大過ないことを指摘した。

本論第二編「諸事考証」は、安徳天皇の周辺と平氏の動静についての考証である。

その第一章「安徳天皇の周辺」は、安徳天皇の大嘗会延引についての考証と、幼帝安徳の同興者についての考証である。

第一節「安徳天皇の大嘗会延引」は、安徳代大嘗会の二年延引の異例の度合いを確認するために、歴代大嘗会の延引の例を検証しつつ、安徳代の延引過程を主に『玉葉』によって描出した。その上で、延慶本以下の所謂読み本系諸本に見られる大嘗会延引の先例に関する本文が持つ意味、平城・嵯峨・朱雀・三条が先例として挙げられた意味を解明し、安徳代の大嘗会二年延引の真因についての読み本系諸本の認識を考察した。その結果、この挙例記事については、現存延慶本『平家物語』と『園太暦』とが共通の基盤の上にあったであろうことがわかった。また、読み本系特に延慶本及び長門本『平家物語』に挙げられた大嘗会延引の先例は無作為な挙例ではなく、新都造営と遷都計画、即位後大嘗会前の諒闇、という二要件の先例として、嵯峨、朱雀・三条が挙げられているのであり、それらに先行して平城代の兵革が第一に挙例されていることには、以仁王の挙兵を安徳代大嘗会延引の要因の一つと見るという意識が暗示的に込められていたのではないかと推察した。そしてこれらの挙例は、安徳代の大嘗会二年延引を批判するためのものであり、生涯すべてが異例であった安徳天皇の運命を物語る一節としても位置づけられることを論じた。

第二節「安徳天皇の同興者」は、単独で興に乗れない幼帝の同興者が厳格に定められていることと、その具体的事例とを確認した上で、三歳で即位した安徳天皇の同興の実態を追尋し、『平家物語』における福原遷都時と平氏都落ち時の同興者の描写の意味を探った。多くの『平家物語』諸本は、福原遷都時は、事実は先規通りに母后徳子が同興したにもかかわらず乳母帥典侍が同興と記し、都落ち時は、事実は先例を破って用車し乳母達と同車したにもかかわらず母后徳子が同興と記していることを指摘し、この背景には、突然の行幸という点で共通する両事例を記す際に、「物語の作為」があった可能性を推察した。そしてその作為は、平氏とその眷属の専横や平氏主導の遷都への批判の傾きが少しく反映した結果であることを述べた。

第二編第二章「平氏の動静」は、平氏都落ちの実態を藤原尹明と全真の例から探り、また、『平家物語』の富

土川合戦の水鳥の記述から、富士川合戦の実態と『平家物語』諸本の本事件の扱いについて述べたものである。

第一節「平氏都落ちの尹明と全真」は、『平家物語』の語り本系の一部伝本で藤原尹明が、また諸本で権少僧都全真が、寿永二年（一一八三）七月二十五日の平氏都落ちに同行したと記されていることに対し、『玉葉』や残欠本『僧綱補任』等から、両者共に後日合流した可能性が高いこと、壇浦で生け捕られたことが都落ち当初から同行していたかのような理解を生んだ可能性があること等、を指摘した。

第二節「『平家物語』富士川合戦の水鳥」は、『平家物語』「富士川」の、水鳥の羽音による平氏敗走の記事が持つ意義について論じたものである。『山槐記』と『吾妻鏡』にも水鳥の羽音に驚倒した平氏軍の退散は記されており、この情報はある段階では京都と鎌倉の双方にもたらされていたことは間違いなく、少なくともその情報の伝達者までには、事実として伝わっていたことは認めてよいことを指摘した。先後に類話が見出し得ないことも、この情報が際立って特徴的な、説話以上に説話的なきし一回性の事実であることを物語っているとも論じた。また、『平家物語』諸本の同記事を比較検討し、いわゆる読み本系諸本では水鳥に鳩が多かったと記すこと、長門本以外の諸本が頼朝の不戦勝は八幡神の計らいであると記すこと、を明らかにし、鳩が多かったと記すのは、八幡信仰に重きをなした虚構であると論じた。また、慈光寺本『承久記』に富士川合戦における平氏の敗走の話が記載されており、その時飛び立った鳥はアジ鴨であったとすることから、遅くとも同本成立時にはこの事件が故実となっていたこと、しかしこの部分に関しては『平家物語』とは直接の交渉はなかったであろうことを指摘した。そして『平家物語』の本件記事は、事実に近いものを伝えている可能性を認めてもよいことを述べた。

本論第三編「研究史」は、『平家物語』の成立論と古態論の研究史、二〇〇四～五年の研究動向をまとめたものである。

第一節「『平家物語』の成立論と古態論」は、『平家物語』の成立論と古態論に関わる諸言説や諸研究の流れとその問題点を論述したものである。中世の『平家物語』言説は主に作者に関心が注がれ、現存諸本のいずれを対象としたものであるかは分明でなく、信憑性に問題のあるものが多く、近世になると多少諸本への興味が窺え

るが、それらの成立・作者への追究はそれほど熱心ではないこと等を確認した。近代に入ると、山田孝雄によって本格的な本文研究が開始されて『平家物語』研究は画期的な進化を遂げ、その辺りから作者説も信憑性を帯び、成立時期についての外証も提出される一方で、民俗学的思考法を用いた柳田国男の成立論も、後の研究に大きく影響を与え、特に水原一の説話形成論へと受け継がれたことを指摘した。また、近現代の国文学研究の動向に連れて、諸本研究上は『平家物語』は語り本と読み本の二系に分かれたれ、前者の中では覚一本への関心が集中し、こぞって大系・全集類の底本にされたことは周知のとおりである。後者の四部本と延慶本をめぐっては古態論争が繰り広げられることとなり、四部本古態説が常識とされた時期もあったが、水原の主張する延慶本古態説が次第に優勢となり、現存延慶本は応永期の書写であるにもかかわらず、一時は延慶書写本と同一、さらには原本とも等価として扱う傾向にあったことを確認した。しかし現在では、応永書写本にも改変・訂正の手が加えられていることが明らかとなったことから、今後は、延慶本の部分的「古態」の論証・水原説の再検証をしつつ、いずれかの本に極端に重きを置くのではなく、各伝本に対する各説を絶えず相対化していくべきであることを述べた。

第二節「『平家物語』研究二〇〇四～五年の動向」は、学会の要請に従って、当該時期（平成十六年～二〇〇四年）九月～同十七年（二〇〇五年）一〇月）に発表された『平家物語』関連の研究の傾向と展望を記述したものである。二〇〇五年のNHK大河ドラマが「義経」であったことや、軍記研究者三名の定年退職に伴って各勤務先の学科から記念号が出されたこともあり、『平家物語』研究が活況を呈した時期であった。その中で、出来る限りの論文を取り上げつつ、それらの研究上の価値や意味を記述した。

付編「資料」は、平時忠と、『平家物語略解』著者御橋惠言の略年譜である。

一は、本論第一編第一章第二節「平時忠」論の基礎資料となる、時忠の略年譜である。時忠の兼官のさまや、時に九条兼実を苛立たせる振る舞いの多さ、平氏一門中では実務官人として貴重な人材であったさまが見て取れる。『千載和歌集』に一首載る一応の勅撰歌人でもあるため、詠作拾遺も付した。

二は、出版後八十四年を経てもなお、『平家物語』の研究に於いて参照すべき基礎的注釈書としての価値を失

わなない『平家物語略解』を著した御橋惠言の年譜である。特に仏典・漢籍などの典拠や故実・人名・地名等の考証に優れ、諸本への目配りもきき、「近世の諸注をようやく完全に克服」「注釈史上に屹立する存在」（佐伯真一）とされる同書を、勤務先をもたない在野の研究者が昭和四年（一九二九）段階で著せた背景には、いかなる経緯があったのか。それを探るべく、ご家族や関係者のご協力を仰いで調査した。その結果、生家が山形県内でも有数の真宗大谷派の古寺であり、幼少期から経典や漢籍の素養を身につけていたこと、中学時代に著名な漢学者に啓発を受けたであろうこと、国書刊行会・群書類従完成会の研究員の立場であったこと、諸辞典の編纂に携わる中で山田孝雄・赤堀又次郎らと知遇を得ていたこと、山田の設立した国学研究所の終身研究員であったこと、松山常次郎（実業家）・風間幸右衛門（風間銀行頭取）らに経済的援助を受けていたであろうこと、などが明らかになった。おそらくは、古典の価値を知る教育を受け、古典研究の正統な方法を学びつつ、多くの資料が参照可能な環境を得て、資金面でもそれなりに融通が利いたために、大正十二年（一九二三）〜昭和二十二年（一九四七）期を中心に多数の著作を成せたのであろうことが推察されるところである。